

セノミネート

村田 修一
(巨人/内野手)

06年に生まれた長男が低出生体重児だったことから08年に新生児医療への支援を開始。12年からは「ささえるん打基金」と題し、1打点につき1万円を寄付。少しでも多く支援しようと14年からは1安打につき1万円に変更した。

東出 輝裕

(広島/1軍打撃コーチ)

09年オフに若手選手たちに呼びかけ、広島赤十字・原爆病院の小児病棟を共に訪問。翌年から球場招待も実施している。現役引退後も活動を続け、昨年で8回目を迎えた。この間、延べ30人の選手が参加している。

岩田 稔

(阪神/投手)

自身が高校2年時に発症した1型糖尿病の患者のため、09年から毎年1勝につき10万円を「1型糖尿病研究基金」に寄付。16年までに430万円に達した。また08年から患者と家族400人以上を試合に招待している。

筒香 嘉智

(DeNA/外野手)

14年オフにドミニカ共和国で行われたウィンターリーグ視察の際、野球が盛んでありながら用具が不足しているのを目の当たりにし、支援を開始。同国とグアテマラ共和国、エクアドル共和国にNPO法人「BBフューチャー」を通じ用具を提供している。

大野 雄大

(中日/投手)

社会福祉法人愛知県母子寡婦福祉連合会を通じて、ひとりの親の家族をナゴヤドームの試合に招待する「大野雄大招待プロジェクト」を今年から開始。観戦チケットに加え、お弁当、ソフトドリンク、応援グッズもプレゼント。これまで60組を招待している。

大引 啓次

(ヤクルト/内野手)

11年から小児がん専門治療施設「公益財団法人がんの子どもを守る会」と「NPO法人チャイルド・ケモ・ハウス」へ年間の安打数と犠打数、犠飛数に応じて寄付を続けている。昨年まで693万円を寄付。

ゴールデンスピリット賞

GOLDEN SPIRIT AWARD

球場外の

- ゴールデンスピリット賞 歴代受賞者**
- 第1回(1999年) **松井秀喜**
 - 第2回(2000年) **片岡篤史**
 - 第3回(2001年) **中村紀洋**
 - 第4回(2002年) **飯田哲也**
 - 第5回(2003年) **曾井上一樹**
 - 第6回(2004年) **赤星憲広**
 - 第7回(2005年) **野村浩将**
 - 第8回(2006年) **和田毅**
 - 第9回(2007年) **三浦大輔**
 - 第10回(2008年) **岩隈久志**
 - 第11回(2009年) **小笠原道大**
 - 第12回(2010年) **三浦大輔**
 - 第13回(2011年) **山崎武司**
 - 第14回(2012年) **藤川球児**
 - 第15回(2013年) **宮本慎也**
 - 第16回(2014年) **栗山巧**
 - 第17回(2015年) **今江敏晃**
 - 第18回(2016年) **内海哲也**

プロ野球人の社会貢献を表彰

佐山 和夫 ノンフィクション作家。米大リーグに造詣が深い。ゴールデンスピリット賞の提唱者の一人。

長嶋 茂雄 読売巨人軍終身名誉監督。現役時代のチャリティ活動が評価され、1983年に「プロ野球コミッショナー賞」を受賞。

一屋 裕子 日本バスケットボール協会会長。東京オリンピック・パラリンピック大会組織委員会顧問。バレーボール女子日本代表としてロス五輪銅メダル(敬称略・50音順)



プロ野球人の社会貢献を表彰

「プロ野球人」として初めてローマ法王ヨハネ・パウロ2世に謁見(えっけん)した。88年パチカン市国からパチカン有功十字勲章を受賞。

報知新聞社代表取締役社長

佐山 和夫
(ノンフィクション作家)

「二刀流」選手の出現もすごい話だし、投げて、打って、守れての「三拍子」選手の話も高校野球などではよくある。プロ野球なら、

能力を最も有効に生かす働き口を見つけてくれるいいエージェントがいていて、エージェンシー「四拍子」も、大リーグには、実はそれをさらに上回る「五拍子」もあって、これらに加えて、社会への貢献度が入られると考えた。

日本版ロベルト・クレメンテ賞

メンテだった。ライフル・ス休暇を楽しんでいた。折アームと呼ばれる選投力は抜群。首位打者になること4度の打撃は、粗野ながらも、エルト・リコ出身の褐色の選手とロビンソン、ジャッキー・ロビンソン、2倍の苦しみ味わったとき、誰が想像したであろう、その機がサンフランシスコの海に落ちようなど。

大リーグでは、それまであったコミッショナー賞を、今年が19回目、

「プロ野球球団に所属する人の中から、積極的に社会貢献活動を行っている人を表彰する。毎年1回選考委員会(委員名別掲)を開いて、球団推薦と選考委員推薦で選ばれた候補者から1人を選定する。欧米のスポーツ界では社会貢献活動が高く評価され、中でも米大リーグの「ロベルト・クレメンテ賞」が有名で、球界での最高の賞として大リーグの憧れの的になっている。日本では試合での活躍を基準にした賞がほとんどで、球場外の功績を評価する表彰制度は初めて。いわば「球場外のMVP」。受賞者にはゴールデントロフィー(東京芸術大学名誉教授・網谷幸二氏作成のプロニス像)と阿部雄二賞(100万円)が贈られる。また受賞者が指定する団体、施設などに報知新聞社が200万円を寄贈する。

第19回受賞者来月8日発表

プロ野球人の社会貢献活動を表彰する報知新聞社制定「ゴールデンスピリット賞」が今年で19回目を迎え、候補者が出そろった。今年も監督、選手、球団関係者など15人がノミネート。活動も年々、多岐にわたる。新生児医療支援、1型糖尿病基金、ひとり親支援、小児病棟への訪問、海外への支援など、多くの選手がさまざまな社会貢献に携わっている。日本版ロベルト・クレメンテ賞は11月8日に発表される。

中田 翔
(日本ハム/内野手)

今シーズンから札幌ドームの主催58試合で、北海道内のひとり親家庭を招待する「絆シート」を設置。またファーム本拠地のある千歳市鎌谷市のひとり親家庭を東京ドームに招待し、交流を図っている。

田中 賢介
(日本ハム/内野手)

08年から12年まで行ってきた乳がんの早期発見・治療を啓発するピンクリボン活動を、日本球界に復帰した15年から再スタート。16年からは守備機会1回と1安打につき2人分ずつの乳がん検診料を負担している。

井口 資仁
(ロッテ/内野手)

各地の児童養護施設に寄付、訪問、野球教室の実施を行う。また被災地への支援をファンにも呼びかけ、各地へ義援金や車いすなどを贈っている。さらに野球振興のため、野球教室実施にも力を注いでいる。

西 勇輝
(オリックス/投手)

11年から登板試合での投球1球につき1本(勝利投手の場合は2倍)のポリオワクチンをNPO法人「世界の子どもにワクチンを日本委員会」を通じて寄付する活動を開始。昨年までに42万5000円を寄付。

稲葉 篤紀
(日本ハム/スポーツ・コミュニティ・オフィサー)

09年から14年の引退まで、1安打につき1万円を小児用救急救命キットのために積み立て、627万円を贈った。10年からは道内の小学校にリレーバトン、少年野球1000チームにボールケースを贈呈する活動を、現在も続けている。

阿部雄二賞 2001年4月9日、本賞を第1回から協賛している株式会社サアラ麻布の代表取締役社長・阿部雄二氏が逝去。同氏の遺志として3000万円が報知新聞社に寄贈された。報知新聞社はその遺志を尊重し、長く後世に伝えるため「阿部雄二賞」を創設した。

パノミネート

工藤 公康
(ソフトバンク/監督)

昨年熊本地震と福岡豪雨水害に対して、個人として義援金や寄付、被災地訪問や学校訪問を行った。福岡市立こども病院や九州大学病院小児医療センターへの激励訪問なども行っている。

秋山 翔吾

(西武/外野手)

自身もひとり親家庭に育った経験から、15年から埼玉、東京、神奈川、群馬のひとり親家庭の親子を、年間160人招待。試合前には招待者とサイン会や撮影会で交流している。

炭谷 銀仁朗

(西武/捕手)

15年から、難病の子や障害児とその家族を試合に招待したり、小児科病棟や障害児入所施設などを慰問している。またファンも参加できるファンレタリングサイトを利用し、自らの成績に応じた寄付も行っている。

嶋 基宏

(楽天/捕手)

15年から自身のヒット1本につき1万円を、仙台市のピンクリボンフェスティバルに寄付。また今年からは障害児とその家族をKOBOPARK宮城の「嶋ルーム」へ招待するなど、活動は幅広い。

西 勇輝

(オリックス/投手)

11年から登板試合での投球1球につき1本(勝利投手の場合は2倍)のポリオワクチンをNPO法人「世界の子どもにワクチンを日本委員会」を通じて寄付する活動を開始。昨年までに42万5000円を寄付。

稲葉 篤紀

(日本ハム/スポーツ・コミュニティ・オフィサー)

09年から14年の引退まで、1安打につき1万円を小児用救急救命キットのために積み立て、627万円を贈った。10年からは道内の小学校にリレーバトン、少年野球1000チームにボールケースを贈呈する活動を、現在も続けている。

わたしたちは
ゴールデンスピリット賞を応援しています

サアラ麻布 ESTABLISHED IN 1974

Canon キヤノンマーケティングジャパン株式会社

あなたの夢を技術で創造 株式会社 トーヨー建設 TOYO ENERGY FARM CO.,LTD.

株式会社 岡田製作所

保険情報サービス株式会社 Insurance Information Service